

## 活動名 七尾市における「比較文化調査実習」「能登フィールドワーク」の実施

団体名 人文学部国際文化学科

代表者名 小西賢吾（教養教育部准教授、担当教員）

### はじめに（背景・目的・目標）

2016年に設置された本学人文学部国際文化学科は、1年次からの海外留学等により培ったグローバルな視点と、ローカルな地域の文化や課題をつなぐことを学部教育の主眼の一つとしている。今年度は3年次配当の専門科目が本格的に開始され、フィールドワークを調査方法とする文化人類学が専門の教員による「能登フィールドワーク」「比較文化調査演習」が初開講された。2018年3月に本学と七尾市が包括連携協定を締結したことをきっかけに、これらの授業における七尾市でのフィールド調査活動の可能性を打診した。その結果、七尾市教育委員会および、2018年10月七尾市に開館した「のと里山里海ミュージアム」との連携のもとで、フィールド調査を通じてグローバル社会における能登文化の位置づけを考察し、能登文化の国際的な発信や地域文化の振興を目的とする活動を行うこととなった。

### 活動内容

今年度はテーマを「祭り」に設定し、七尾市で行われる祭りにおいて、参与観察とインタビューによる調査を実施した。受講学生はのべ17名、調査の概要は以下の通りである。

「比較文化調査演習」（第2クォーター開講）

七尾祇園祭 2018年7月14日

向田の火祭 2018年7月28日

「能登フィールドワーク」（夏期集中）

お熊甲祭 2018年9月18-20日

予備調査として、石崎奉燈祭 2018年8月4日

「比較文化調査演習」（第4クォーター開講）

鶴様道中・鶴祭 2018年12月12、13、16日

事前学習として、能登文化の特徴を座学で学ぶとともに、祭りに関する先行研究文献の英語訳などの課題を実施した。また、比較文化調査演習においては、基本的な撮影技術や映像編集の技術を習得する

ために、金沢市在住の映像作家ジョン・ウェルズ氏（金沢21世紀美術館勤務、ドイツ・ミュンスター大学大学院映像人類学専攻修士課程）を外部講師とするワークショップを開催した。ワークショップでは、学生たちが実習を通じてインタビュー撮影の方法を学ぶとともに、映像編集ソフトの基本的な操作方法を身につけた。

実際のフィールドワークでは、本学と七尾市を往復し、早朝から深夜にわたるインテンシブな調査を行った。また、「能登フィールドワーク」においては、合宿形式の調査を行い、祭りの本番のみならず、準備期間中の取り組みについて、体験を通じて理解するとともに、多くの方にインタビュー調査を行った。この過程では、各祭りを運営する神社や町会、青年団、婦人会などの皆さまから多大なご協力を賜った。



写真1 「能登フィールドワーク」におけるお熊甲祭調査（七尾市中島町、2018年9月20日）

調査で得た資料をもとにして、「能登文化を英語で発信するコンテンツ」を作成すべく演習を行った。特に映像制作を中心とし、ビデオカメラやスマートフォンで撮影した映像をPC上で編集し、インタビューへの英語の字幕添付などを行った。その際、「文化の翻訳」を意識し、地域固有の概念をどのように英語で表現するかについて集中的な議論を行った。

## 成果、結果の考察

各授業での活動をもとに、それぞれの祭りの映像や、ポスターなどが完成した。映像は、祭りの伝統の継承に携わる方々をはじめ、移住者、観光客などへのインタビューをもとに、祭りの魅力と現代における意義を考えさせる内容となった。

この成果の特徴としては、祭りの当事者の目線にたつて、伝承の継承や変容、魅力について率直な語りを収集し、それを発信しているところにある。七尾の祭りに関しては、これまで多くの研究の蓄積がある。いわゆる七尾四大祭（青柏祭、向田の火祭、石崎奉燈祭、お熊甲祭）をはじめとして、各地の小規模な祭りや行事についても調査が行われてきた（七尾市史編纂専門委員会 2003；「図説七尾の歴史」編集委員会 2014；七尾市教育委員会 2013；道端 2016 など）。また、能登の文化を映像で紹介する試みとしては、「能登の里山里海デジタルアーカイブ(<http://noto-satoyamasatoumi.jp/>)」があり、一部のコンテンツは英語化されている。これらに対して、本活動の成果では祭りの構造や民俗学的な特徴を明らかにすることに加え、現場の声を通じて文化としての祭りの価値を浮き彫りにすることを主眼としていることが特徴である。

2019年2月23日、のと里山里海ミュージアムにおいて報告会「里山里海グローバルチャンネル—七尾の祭り編」を開催した。3つの授業の受講学生7名が参加し、それぞれの調査について概要を説明した後、映像の上映やポスターの説明などを行い、調査の感想や考察を述べた。調査対象となった方々を招待し、地域文化の継承をともに語り考える場を作ることも目的とした。ミュージアム館長の和田学氏からは、ナレーションやキャプションに関する具体的な改善点の指摘を含む講評をいただいた。このほか、会場からも祭り固有の語彙に注目したコンテンツに期待するコメントや、若い世代の視点を知ることができ大変有益で刺激になったとの声も聞かれた。



写真2 のと里山里海ミュージアムでの報告会  
「里山里海グローバルチャンネル—七尾の祭り編」  
(2019年2月23日)

## 今後の課題、展望

発表会で得られたアドバイスは、今後この活動を能登文化の国際発信のためのコンテンツへと質量ともに育てていくために不可欠なものである。今年度が初の試みであったため、映像作成の方法や手順について次年度以降より効率化が必要である。あくまで1授業としての枠組みで制約も多い中、貴重な時間を割いてくれた受講学生にも感謝したい。次年度以降も、この活動では能登文化の様々な側面をとりあげ、地域の方々との対話を通じて、地域文化の価値を発見・発信できる取り組みを続けていきたい。

## 参考文献

図説七尾の歴史編集委員会編

2014『図説七尾の歴史』七尾市。

七尾市史編纂専門委員会編

2003『新修七尾市史 民俗編』七尾市。

七尾市教育委員会編

2013『お熊甲祭：国指定重要無形民俗文化財  
熊甲二十日祭の杵旗行事』七尾市。

道端弘子編

2016『鶴様道中：のと師走の風物詩』鶴様道中の宿保存会。